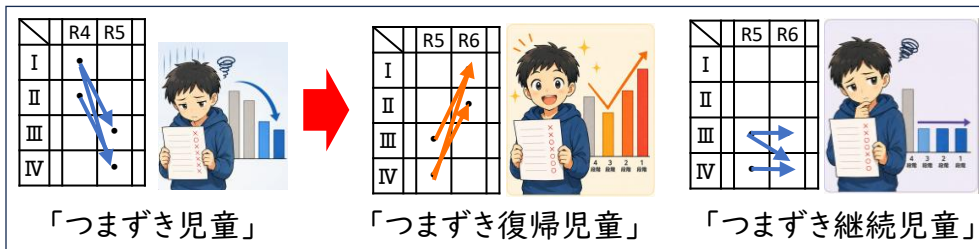
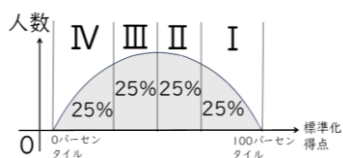


学力のつまずきがみられる児童の復帰に向けた支援のヒント
—小学校学力経年調査及び質問紙調査の結果分析を通して—

つまずき児童とは？

(図2) つまずきとつまずき復帰のパターン

(図1) 成績区分の概念図



調査分析グループでは、児童の学力向上に向けて「学力のつまずき」に焦点を当てた研究を行っています。本研究では、小学校学力経年調査の四分位成績区分(図1)において、昨年より2段階以上の下降が見られた児童を「つまずき児童」、「つまずき児童」のうち翌年に2段階以上の上昇が見られた児童を「つまずき復帰児童」、2段階以上の上昇が見られなかった児童を「つまずき継続児童」と定義(図2)し、児童がつまずく要因とつまずきから復帰する要因について分析しました。本号では、研究から「つまずき復帰児童の背景要因」について、一部ご紹介します。

研究詳細は、総合教育センターのホームページに「大阪市総合教育センター研究紀要 第4号」として掲載していますのでご覧ください。

<https://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000651/651064/20254.pdf>



大阪市総合教育センター 研究紀要 第4号

分析対象

【回収データ】令和3年度～令和6年度 大阪市小学校学力経年調査の学力調査問題に対する解答データ、児童質問紙調査への回答データ、学級担任質問紙調査への回答データ

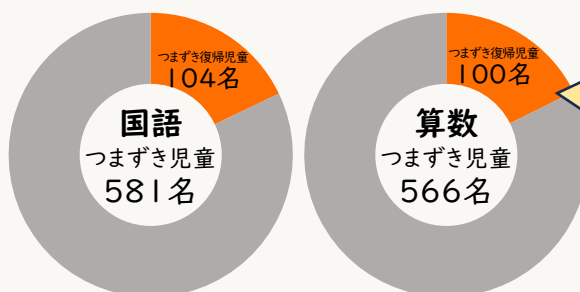
【対象児童】17,888名※

【分析対象教科】国語・算数

※6年生の時点で調査日当日に受検した3～6年生の児童の紐付きデータを使用している。
(3～5年生の時点で未受検の児童も含むため、分析の用途に応じて、分析対象の児童の数はこの数字よりも小さくなる。)

つまずき児童とつまずき復帰児童の状況

(図3) つまずき児童の翌年つまずき復帰の割合



※有効児童数は国語15,562名、算数15,376名。

つまずき復帰児童
国算ともに約18%



左のグラフは、令和5年度5年生時点で「つまずき児童」に該当する児童のうち、令和6年度6年生で「つまずき復帰児童」となった児童の割合を示しています。国語・算数のいずれの教科においても、約18%の児童がつまずきから復帰していることが分かります。

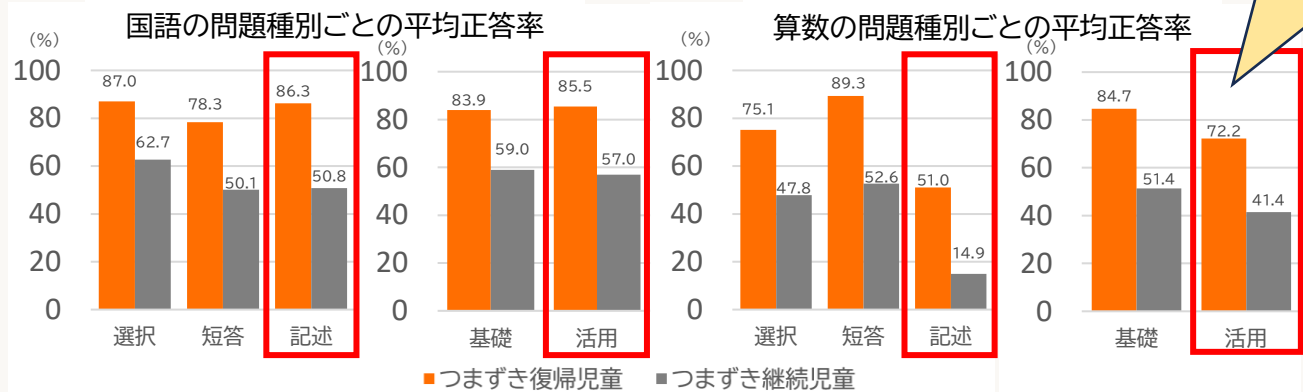
では、つまずき復帰児童の背景には、どんな要因があると考えられるでしょうか？



つまずき復帰児童とつまずき継続児童の問題種別ごとの平均正答率

つまずき復帰児童
記述や活用で
正答率の違い(比)が大きい

(図4)つまずき復帰児童とつまずき継続児童の問題種別ごとの平均正答率



つまずき復帰児童が、どのような問題でつまずきから復帰しているのかについて、学力調査問題の問題種別ごとの平均正答率の違いを、つまずき継続児童と比較しました(図4)。学力調査問題は、各問について解答形式(選択・短答・記述)と基礎・活用の種別が設定されており、全体を含めた6種類の正答率分布の比較をしたところ、いずれの種別においても、統計的に有意差があることが分かりました。*

この表を見ると、国語も算数も、解答形式の中では記述問題で正答率の比の値が大きくなっており、基礎・活用の種別においては基礎問題よりも活用問題のほうが正答率の比の値が大きくなっていることが分かります。つまり、つまずき復帰児童には、単なる基礎知識の定着にとどまらず、つまずき継続児童が苦手としやすい記述問題や活用問題に対して、思考した内容を表現したり既習事項を活用したりする力を伸ばして克服した過程があったことが考えられます。

※6種類の正答率分布の比較(各棒グラフのペア)について、ウィルコクソンの順位と検定を適用した。

児童質問紙調査の分析

(表1)「好き」「わかる」と学力の関連性

	国語	算数
好きと正答率の相関係数	0.19	0.37
わかると正答率の相関係数	0.34	0.48

※各児童の国語と算数の正答率(0~100%)と、質問に対する4件法の回答(4, 3, 2, 1)をスコア化したデータとの間の相関を計算して、無相関検定(t検定)を行った。(いずれも $p < 0.001$)

また、つまずき復帰児童とつまずき継続児童の、「好き」の割合と、「わかる」の割合の差を比較すると、国語も算数も、「好き」のほうが割合の差が大きいことが分かりました。(図5)

すなわち、つまずきから復帰する要素として、「教科の勉強が好き」であることが、一定の役割を示している可能性が考えられます。

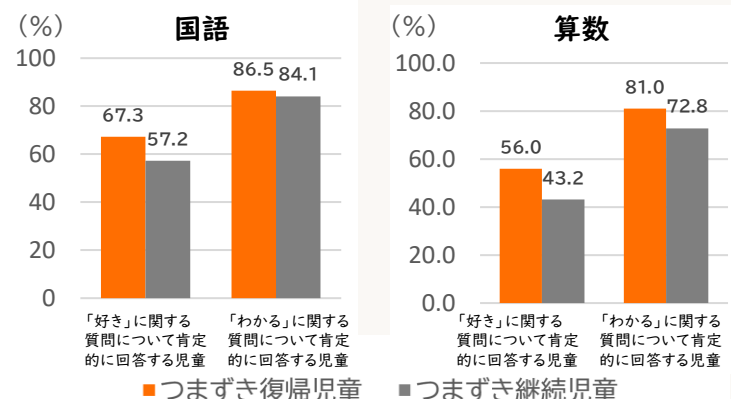
なお、それぞれの数値を順位と検定したところ、算数の「好き」に関する肯定的回答にのみ有意差がみられ、「算数のつまずきからの復帰」には特に「教科の勉強が好き」であることが効果を及ぼしていると考えられます。

次に、児童質問紙調査の結果から、つまずき復帰児童の復帰の要素として、非認知的な特性(教科の勉強が好き)との関連性について分析しました。

(表1)は、「国語(算数)の勉強は好きですか」「国語(算数)の授業はよくわかりますか」の回答結果が、児童の学力とどの程度関係があるのかを示したものです。*

国語・算数ともに、「教科が好き」よりも「授業がわかる」ことのほうが学力との関連が高い結果となった一方で、「好き」と学力にも有意な関連がみられ、「教科の勉強が好き」であることも学力向上に一定程度寄与している可能性が示唆されました。

(図5)つまずき復帰児童と継続児童の「好き」「わかる」比較



【表の見方①】5年生の時に「算数の勉強が好き」「授業はよくわからない」と回答した児童のうち、49.4%にあたる211名が、6年生で「算数の授業が好き」「授業はよくわかる」と回答している、ということがわかります。

(表2) 「好き」「わかる」の組み合わせの変化
国語

小6へ	好き _わかる	好き _わからない	好きではない _わかる	好きではない _わからない
小5から 好き _わかる	7,843 (76.8%)	218 (2.1%)	1,735 (17.0%)	414 (4.1%)
好き _わからない	235 (54.3%)	36 (8.3%)	77 (17.8%)	85 (19.6%)
好きではない _わかる	1,464 (35.1%)	89 (2.1%)	2,122 (50.8%)	499 (12.0%)
好きではない _わからない	387 (26.0%)	56 (3.8%)	492 (33.1%)	552 (37.1%)

算数

小6へ	好き _わかる	好き _わからない	好きではない _わかる	好きではない _わからない
小5から 好き _わかる	7,221 (77.0%)	243 (2.6%)	1,346 (14.3%)	572 (6.1%)
好き _わからない	211 (49.4%)	39 (9.1%)	65 (15.2%)	112 (26.2%)
好きではない _わかる	1,156 (30.6%)	61 (1.6%)	1,802 (47.7%)	758 (31.4%)
好きではない _わからない	448 (17.5%)	99 (3.9%)	641 (25.0%)	1,376 (53.7%)

※経年的な変化を読み取りやすくするために、小5と小6で同じ回答をしている児童の割合の箇所に青色をつけています。

表2は、5年生における「好き」と「わかる」の回答の組み合わせが、翌年にどのように変化したかを表しています。国語も算数も、「好き_わかる」児童は翌年も約8割が「好き_わかる」のままであり、意欲をもって継続的に学んでいる児童であると考えられます。ここで注目したいところは、**5年生で「好き_わからない」と回答した児童が、翌年に「好き_わかる」へ変化した割合が高くなっている、ということです。「その教科の勉強が好き」ということが、理解の促進に関係している可能性が示唆されたと言えます。**



学力向上のヒントは「好き」にあり！

「授業がわかる」以上に、「教科の勉強が好き」という気持ちが、学力復帰の可能性を秘めている！

※なお、「小3から小4」「小4から小5」でも上記と同じ傾向でした。経験から、『「授業がわかる」ことで「教科の勉強が好き」になるのでは?』と考える先生方も多いと思います。膨大なデータから分析した結果、「教科の勉強が好き」であることが「授業がわかる」ことにつながる、という可能性が示されました。

担任質問紙調査の分析

(表3) つまずき復帰児童と継続児童で
有意差のある担任質問項目

国語	算数	
	番号	質問項目
有意差のある質問項目は みられなかった	1	調査対象学級の児童は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか
	6	授業の中で計画的に、目標(めあて・ねらい)を調査対象学級の児童に示したり、児童に考えさせる活動を取り入れたりしましたか。
	7	授業の中で学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れましたか。
	18	調査対象学級の児童に対する社会科の指導として、体験的な活動を重視して社会生活を理解するとともに、社会に参画する態度を育てる授業を行いましたか。
	32	調査対象学級の児童の指導に、学習教材データ配信を活用した教科はどれですか。(理科で回答)
	39	調査対象学級の児童に対して、学習教材データ配信を活用した場面はいつですか。(朝学習で回答)
	40	調査対象学級の児童に対して、学習教材データ配信を活用した場面はいつですか。(臨時休業中と回答)
	46	授業外の学習活動(朝学習・モジュールタイム、放課後学習・宿題等)でデジタルドリルを活用していますか。(授業外と回答)

担任質問紙調査の回答データから、つまずき復帰児童とつまずき継続児童をそれぞれ受け持った学級担任の回答傾向に差がみられるかどうかについて分析すると、国語については有意差が見られませんでした。算数は8つの質問項目で有意差が見られました。(表3)

担任質問紙調査は、つまずき児童への支援方法を問う趣旨の調査ではないものの、**算数のつまずき復帰過程には、学級担任の支援体制、クラスの協調性、問題解決過程への支援などが影響している可能性があります。**



まとめ

本研究結果より、**つまずきから復帰した児童は、基礎知識の定着に加え、記述・活用問題への対応力がついてきていることや、「その教科の学習が好き」という気持ちをもっているという傾向が掴めました。**また、学級担任による授業改善も影響している可能性も示唆されました。このことから、児童が「わかる」「できる」を実感できる授業づくりとともに、学ぶ楽しさや前向きな気持ちを育む関わりを一層充実させることが大切だと考えられます。調査分析グループでは引き続き、学力向上に向けた児童のつまずきの把握や、つまずきを減少させるための効果的な関わり方について研究を進めてまいります。



文部科学省が公表した「論点整理」※にも、次期学習指導要領の基本的な考え方として「**好きを育み、「得意」を伸ばす**ことが示されています。児童一人一人の「好き」を出発点に、「わかる」につながる授業実践を積み重ねていきましょう！

※令和7年9月25日 文部科学省 教育課程企画特別部会「論点整理」